

翁名修治，字之翰，號退翁，尾張國愛知郡下之一色村木村和兵衛第二男，以文政十一年六月生，年過志學，入名古屋藩儒奧田鳳文門，修漢學，後就伊藤圭介，研究本艸，傍習蘭書，嘉永元年，爲伊勢國朝明郡川北村丹波衛門義嗣，無幾擢信樂代官所年寄役，七年六月，地震，朝明川堤崩壞，翁，拋私財，修理復舊，安政元年，爲庄屋役，翌年許帶刀稱氏，尋進大庄屋格，四年五月，大水朝明川潰，至七月又大浸，翁請怨藩，督課村民修築堤防，再復其舊，明治四年，藩廳有設學校于大矢知村之舉，翁應問，陳置和漢洋三部之議，任洋學部教頭，五年，官將送方物于澳國博覽會，翁應徵，東上奉命巡遊勢伊紀志尾濃六國，檢覈物産，三年，畢事，官賜金帛賞功，十年，官創開內國勸業博覽會，翁命三重縣勸業課出仕，尋任第五部審査官，四十一年十月，得病，十二月十二日溢焉逝，享年八十有一，葬于廣永村淨泉寺先塋之次，翁爲人温和，風采嫺雅，學邃本艸，傍善國歌，通茶儀，致仕之後，優游自適乎名利外，同好結社，每月相會品評珍異，鑒賞書畫，春秋二次陳列天産工藝，庶品廣供衆人觀覽，以爲第一樂事，晚年設國風會，誘掖後進，點茶挿苳並皆結社，以自娛兼教人，朝明郡人多解風雅，蓋翁之賜也，所著有本艸圖譜三重縣礦植物解説等若干部項，鄉右胥謀建碑，具狀乞余銘，余曾辱忘年交誼，不可辭，乃作銘曰

羣藝兼才 博物講學 拋官閑居 自樂厥業
嘉哉退翁 名實相若

明治四十四年七月 文學博士前田慧雲撰
津市 市川進書丹

丹波修治は、植物採集や研究を行う傍ら、多くの印葉図を作成した。印葉図とは植物の形を魚拓のように直接、あるいは拓本のように間接的に墨によってその形を忠実に紙に写し取ったものである。18世紀にドイツ人クニフォフによって作成された『植物印葉図譜』が一時期伊藤圭介のもとにあり、これを尾張本草学者の中で研究されて、尾張の得意とする技術となった。この図譜にはおよそ千種類の植物が収載されていたとされ、現存する写本はいずれも彩色されていないが、同時期に作成されたクニフォフの図譜が、現在国立国会図書館に収蔵されており、いずれも彩色されていることから、これらの図譜は、いずれも墨によって写し採ったものに彩色したものと考えている⁴⁾。

各地に所蔵されている丹波修治の印葉図譜のうち、国会図書館所蔵の「真影雑草之類七十一種」、「真影齒朶之類」、「本草真影 [本草真影巻之拾一]」、西尾市の岩瀬文庫所蔵の「菊池真影本草」、杏雨書屋所蔵の「於しば画 (安政5・1858)」、「本草真影残一卷」、三重県朝日町所蔵の「植物真影」を比較したところ、同時期に作成された印葉図であることが判明した。

【参考資料】

- 1) 浅井平一郎著 北勢博物学界の明星『丹波修治先生傳』孔版印刷
- 2) 松島博：『近世伊勢における本草学者の研究 第八章 丹羽修治』（講談社）
- 3) 磯野直秀：日本博物学史覚え書 XV，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 No. 48，59-70（2010）
- 4) 河村典久：キニホフ『植物印葉図譜』の写本，伊藤圭介日記，第20集，217-234（2014）

（平成27年12月六史学会合同例会）

「義犬」の歴史と動物愛護史

小佐々 学

人によって最初に家畜化された動物は犬（イヌ）で、DNA解析などから犬の祖先は狼（タイリクオオカミ）とされている。文明・文化の起

源は「人の社会化」と「動物の家畜化」だと考えられており、人類にとって犬の家畜化は重要な出来事であった。犬は狩猟や番犬として「使役犬」

とされていたが、「愛玩犬（ペット）」と呼ばれるようになり、今では「伴侶犬（コンパニオンやパートナー）」として「家族の一員」とされており、最も身近な動物になっている。

多くの人が知っている「忠犬」という言葉は、昭和初期に渋谷駅前で待っていたというだけで、マスコミなどで大々的に喧伝されて全国的に有名になった「忠犬ハチ公」に対して初めて使われた新語である。一方、「義犬^{ぎけん}」は忠犬という言葉が余りにも有名になったため、今では死語になってきているが、古代から明治時代まで使われていた由緒正しい用語である。命懸けで主人を守ったり、主人やその命令のために殉じたりして、飼主のために強い自己犠牲を伴った行動をした犬たちは「義犬（義狗）」と呼ばれていた。このように飼主を信頼して慕っていた義犬は「究極の愛犬であり伴侶犬」だったのである。

日本における本格的な動物愛護、動物福祉やヒューマン・アニマル・ボンド（人と動物の絆・HAB）などの活動の多くは第二次大戦後の昭和中期以降に欧米から導入されたものであるが、意外にも、かつては日本が欧米よりも動物愛護の先進地だったのである。

西欧の動物観は一神教であるキリスト教にもとづいており、人にとって全ての動物は支配すべき対象であり、かつては動物虐待が日常的に行われていた。また、動物には感情も霊魂もないとされており、動物に対して無情で厳しく、19世紀後半まで動物の墓をつくって葬ることはなかった。

日本の動物観は仏教や神道にもとづいており、仏教では衆生や輪廻転生という教えにより、人と動物の命に明確な区別をつけなかった。特に、神道では八百万の神という多神教的感性により、人と動物の命は同等にあつかわれることが多かった。このように、日本では動物に同情的で優しく、動物が死ぬと墓をつくって葬っていた。現存する動物の墓が少ないのは、一般庶民と同様にその多くが石碑ではなく土盛りの塚だったためである。

日本の動物愛護史上で特筆すべきことは、江戸時代の五代将軍徳川綱吉による「生類憐みの令」である。1685年頃から1708年までに約60回も出

された動物の捕獲禁止・殺傷禁止・保護取容に関する“お触れ”の総称であるが、捨子禁止や行路病者救済など人の保護まで含んだ世界最初の動物保護法であり、「犬公方」が制定した「天下の悪法」を積極的に再評価すべき時代が来ている。

日本の犬に関する史料は江戸時代の数点しかないため犬の歴史は不明であり、動物愛護史の研究は不可能とされていた。そこで、特定の犬の死を悼んで弔った犬の墓（犬塚）を調査したところ、「古代史料の犬塚」・「伝説・伝承の犬塚」・「史実の犬塚」の三種に分類された。特に、長文の碑文が刻まれた史実の犬塚は日本の動物愛護史の貴重な史料であり史跡だったのである。全国各地を調査して認定した江戸時代初期から幕末維新期までの史実の犬塚9ヵ所を年代順に講演会で解説したが、これらは義犬と呼ばれた犬たちの墓であった。紙面の都合で、最古の史実の犬塚だけを以下に紹介する。

日本最古の史実の犬塚は、江戸時代初期（1650年）に建立された肥前国大村藩三代藩主大村純信^{すみのぶ}の守役兼家老であった小佐々市右衛門前親^{こざさあきちか}の愛犬「義犬華丸^{はなまる}」の墓（長崎県大村市本経寺^{ほんきょうじ}・国指定史跡）である。高さ3mの前親の墓の隣には当時の上級武士と同等な高さ90cmの華丸の墓が並んで建っている。この墓は生類憐みの令の35年前で忠犬ハチ公の285年も前の建立である。華丸の墓碑には132文字に及ぶ漢文の由緒書が刻まれており、前親は雄の狆の華丸を常に愛して膝元に抱いていたことが記述されている。このように、主人と愛犬の墓が並んで建ち、しかも両者の交情が活写された碑文を持つ古い犬の墓は世界的にも類例を見ないものであり、動物愛護史上極めて貴重な記念碑である。

2015年には義犬華丸365回忌を顕彰して、本経寺の本堂前に「義犬華丸顕彰墓碑」と共に、観光客や愛犬家に撫でて貰えるように表面を本磨きで仕上げ滑らかにした可愛い幼犬姿の「義犬華丸石像」が有名な石彫家により制作されて設置されており、『義犬華丸ものがたり』（長崎文献社発行）という本も出版された。

（平成27年12月六史学会合同例会）